＊「ポレーシェ」とは、チェルノブイリ付近の湖沼低地帯の呼称です。　№175　2020.02.02

チェルノブイリ救援・中部
発足 30 年 記念イベント 開催予告

＊日時：2020 年４月 26 日（日）13:30～16:30
＊場所：「名古屋 YWCA」3F 多目的ホール ビッグスペース
＊会費：500 円／人（高校生以下および避難者の方は無料）

来たる４月 26 日は、チェルノブイリ原発事故の 34 周年祈念日。
「チェルノブイリ救援・中部」が発足して 30 年、福島原発事故の被災者支援を始めて 10 年目という節目を迎えます。チェルノブイリ支援が、今日の福島の支援にまで繋がるとは、思いもよらぬことでした。
私たちは今も、ウクライナでチェルノブイリの事故処理作業者や汚染地域ナロジチ地区の支援を行い、福島県南相馬市では「放射線量率マップ作成」や「農地再生菜の花プロジェクト」を続けています。
このような節目の日に、救援・中部 30 年の歩みを知っていただくとともに、改めてチェルノブイリと福島原発事故の実態を知っていただきたいと思い、記念イベント「チェルノブイリと福島の今までとこれから」を開催することにしました。是非とも、ご参加ください。

【講演者 プロフィール】
今中 哲二（いまなか てつじ）
京都大学複合原子力科学研究所 非常勤研究員。専門は原子力工学。
1950 年 広島市生まれ。
1976 年 東京工業大学大学院修士課程修了後
京都大学原子炉実験所助手。
2016 年に定年 その後、非常勤研究員。

第一部　今中哲二さんの講演　（約 80 分 質疑応答を含む）
「チェルノブイリの 34 年、福島の９年を振り返りながら
―よく分かっていることと よく分かっていないこと―」
第二部　トークセッション　（約 80 分 質疑応答を含む）
「菜の花プロジェクト」の目指す未来
藤井絢子さん（菜の花プロジェクトネットワーク代表）とチェル救メンバーによるトーク

〒460-0012　名古屋市中区千代田 5 丁目 11-33　ST プラザ鶴舞 本館 5 階 B
NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部
銀　行　名：**三菱 UFJ 銀行 高畑支店（店番号 297）**
口 座 番 号：**普通 1682863**
口 座 名 義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部　理事長　池田 光司
郵 便 振 替：00880-7-108610
ＴＥＬ／Ｆａｘ：052-228-6813（月･水･金 10:00 ～ 17:00）
ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

南相馬便り　（神野 英樹）

★「クリスマスカード」の配布完了！

12 月 12 日から 20 日にかけて、南相馬市内の 10 の幼稚園・保育園などに、「クリスマスカード」を届けた。愛知県からは、S さん・M さんも駆けつけてくださり、サンタさん・トナカイさんとなって、園児達の大歓迎を受けた。カードを贈ってくださった皆々様に感謝！

★「第 18 期 放射線量率マップ」の配布完了！

12 月上旬～下旬にかけて、南相馬市内のマップ掲載拠点（約 110 ヶ所）に、マップを配布。

《マップを受け取ってくださった皆さんの声》

＊測定隊に参加したS さん

今回は、台風 19 号の影響により、除染されていない山林からの「土砂崩れ」とか、ダムや川底に沈殿していた「汚染泥の氾濫」などがあり、放射能が生活圏に迫ってきた可能性がある。まだ、放射能は広範囲に残存しているので、今後も参加して測定を継続したい。

＊事務所にマップを取りに来てくれた I さん

「避難解除」が進むにつれ、人々は高汚染エリアに入り込み、山菜やきのこを採取する機会が増える。危険な場所を「見える化」する「汚染マップ」は、生活必需品となっている。

＊いつも店の玄関口に掲示してくださるMさん

毎回、最新版が届くたび、真っ先に自分達の生活圏の色の変化を見る。継続していただいているからこそ、測定結果を信頼することができ、お客様に自信を持って紹介することができる。

★「年間行事のスケジュール」決定！

今年（令和２年）のイベント等を日程調整して、年間スケジュールを決定した。皆様の手帳にも書き込んでいただき、お誘い合わせの上、ご参加いただければ幸いである。

＊「油菜のさと」第２回 フォーラム
・3/21(土) 15 時～17 時

＊「第 19 期 春の放射能測定隊」
・4/4(土)・5(日)＆4/11(土)・12(日)

＊「第 20 回 菜の花サミット in 小山（栃木県）」
・4/18(土)～4/19(日)

＊「菜の花 花見会」（萱浜圃場にて）
・5/2(土) 10 時～15 時

＊「油菜のさと」第３回 フォーラム
・9/19(土) 15 時～17 時

＊「秋の種まき会」（圃場は未定）
・9/20(日) 10 時～15 時

＊「第 20 期 秋の放射能測定隊」
・10/10(土)・11(日) ＆ 10/17(土)・18(日)

★「JR 常磐線 全線開通」！

＜試運転中の特急「ひたち」（原ノ町駅にて）＞

来る３月 14 日に「常磐線（浪江⇄富岡間）」が開通し、東京⇄仙台間を直結する特急「ひたち」が運行される。一足先に帰還して、地元の復興を願う人々にとっては、明るいニュースではあるが、停車する駅は、各市町毎に１ヶ所のみ、本数も「3 往復／日」のみである（普通列車は、浪江⇄富岡間を「11 往復／日」）。

各駅へのアクセスや街のインフラ整備はなかなか進まず、来年３月には震災から丸 10 年が経過することにより、「復興創生期間」が終了し、様々な補助支援は、ほとんどが廃止される予定である。低迷する「帰還率」に寄与するのは、まだまだ先のことであろう。

＜低迷する「帰還率」と「居住率」（2019 年 10 月末現在）

		住民登録 数（人）		居住状況	居住率 %	帰還率 %
		震災前	現在			
		2011. 3. 11	2019. 10. 31			
南相馬市	鹿島区	11, 603	10, 430	10, 336	99. 1	89. 1
	原町区	47, 116	41, 989	40, 762	97. 1	86. 5
	小高区	12, 840	7, 494	3, 635	48. 5	28. 3
飯舘村		6, 509	5, 492	1, 361	24. 8	20. 9
浪江町		21, 434	17, 000	1, 098	6. 5	5. 1
富岡町		15, 960	12, 972	922	7. 1	5. 8
大熊町		11, 505	11, 102	721	6. 5	6. 3

<ドイツで学んだ福島の高校生による報告会開催>　（岐阜市　井口篤郎）

12月7日…名古屋(ブラザーミュージアム)、8日…岐阜（じゅうろくプラザ）で、「福島の高校生　ドイツ派遣＆再生可能エネルギー見学・報告会」を行いました。名古屋は昨年の3月に続き2回目、岐阜は初めての開催です。毎年、福島の高校生たちをドイツに派遣し、再生可能エネルギーについて学び、現地の高校生たちと交流を図るプロジェクト**(NPO 法人アースウォーカーズ)**の報告会です。2019年の参加者の蛭田里桜さん（立命館慶祥高1年）と戸川華恵さん（福島南高1年）、代表の小玉直也さんにお越しいただきました（「ポレーシェ174号」 P8～P9参照）。

小学1年生の時、東日本大震災に遭遇した彼女たちは、「いじめ」など辛い時期もありましたが、「それでも何か自分たちがしなければいけない」という思いで、このプロジェクトに参加したそうです。

2人は、「ドイツは日本と違い、再生可能エネルギーに関心がとても高く、それ以上に環境への関心が高いのにはビックリした」「学校の授業は、日本は先生の話をノートにひたすら書いているが、ドイツは各自が意見を持ってデイスカッションする授業だった」と話していました。

また、ドイツでは8月6日の「広島デー」に、平和を考え福島を語る集会を小さな町でも開くのに、日本では広島・長崎・福島だけ。市民の参加も少なく、原爆・原発・平和にほとんど無関心。同じ敗戦国ドイツと日本の違いは何から来るのか、と感じたそうです。このような勇気ある高校生たちとともに、前に進んで行かねばならないと思いました。

福島の高校生の貴重な報告会に、肝心の高校生の参加はゼロで、全く申し訳なく思っています。次回は、地元の高校生の参加を目指して、進めていきたいです。

最後に、参加者の方々の感想をご紹介します。

●地震のときの恐い体験を、生の声で聴けてよかったです。他の人に伝えて、このことを風化させないように努めます。
●高校1年生のあなたが、こんなに立派に話をされて、とても感動しました！
●社会に出ると、日本では難しいかもと、思う場面は多いと思いますが、仲間を1人ずつ増やしていってほしいと思います。
●普通のくったくのない女子高生だけど、トラウマをかかえていて、小学校1年生での体験を今も苦しんでいた事。ドイツをきっかけに、前に進めた事が聞けてよかったです。その他の高校生たちが、トラウマを共有することで、お互いの伴走者になっているのかなと思いました。

連載 127

10 年目を迎える福島原発事故

―― 子どもたちに何が起こったか ――

国内ではほとんど報道されなかったが、アメリカでは大きく報道された「福島原発事故前後に生まれた子どもの病気」に関する貴重な論文がある。著者は、名古屋市立大学の村瀬香准教授ら 3 名。同氏らは、チェルノブイリ原発事故で先天性心疾患が増えた事実から、福島原発事故でも同様な被害がなかったかどうかを調べた。その結果、事故前後で、新生児の先天性複雑心奇形が、日本全体で増加していることが分かった。他にも、停留精巣と呼ばれる男児の先天性疾患の増加も明らかになった。

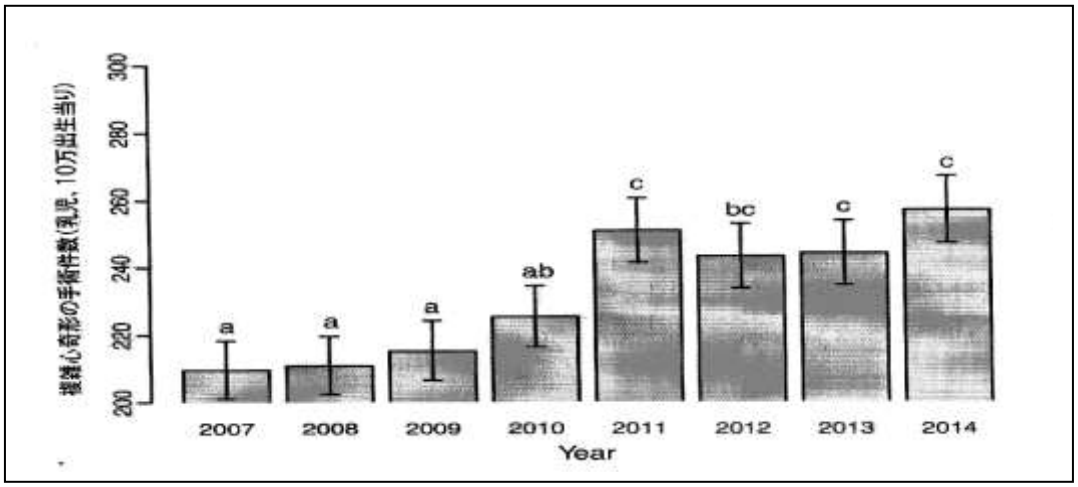
事故前からのデータが決め手

この調査を行うにあたって村瀬教授らは、日本胸部外科学会が、福島原発事故前から全国の病院を対象に先天性心疾患の手術データを集めていた事に着目した。日本胸部外科学会は、全国の胸部外科関連病院（500～600）に、心臓外科手術実施に関するアンケートを毎年行っており、結果を公表している。村瀬准教授等は、そのデータを解析した。その中で、高度な手術を要する複雑な先天性心疾患（複雑心奇形：29 種類）に着目し、福島原発事故前後の変化を解析した。その一部の図を引用する。

事故前は出生数 10 万人当たり 210～230 人だった複雑心奇形手術数が、事故後は 240～260 人に増加した事が分かる。その内訳は、左右の心房の隔壁の欠損が 47.7%増加で最も大きく、その他も含めて 29 種類のうち 9 種類の心臓疾患で、先天性異常が増加した。

事故前後の平均増加率は 14.2%で、統計的に有意な増加である。特に 0 歳から 1 歳までの手術数増加が顕著で、1 歳から 17 歳の子どもの手術数の増加はなかった。これらの奇形は、胎児の発生初期に起こった可能性が高いという。

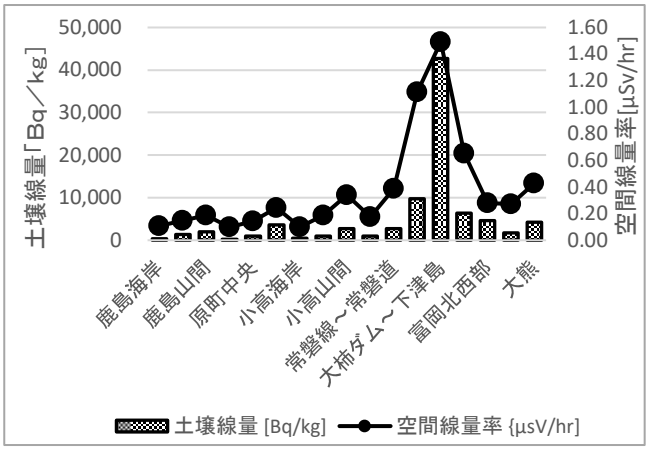
この結果について著者らは、増加の原因が原発事故とは断定できないが、原発事故による放射能の影響の可能性は排除できず、母親達の被ばく線量や事故時の居住地など、更なる精密な調査が必要…としている。論文は、アメリカ心臓学会機関誌（2019 年 3 月 13 日）に掲載された。名古屋市立大学は、翌日記者会見も行い研究結果を公表したが、国内のマスコミは全く取り上げなかった。この他、村瀬准教授らは、同様な調査が全国の 35 県 94 病院で行われた「新生児の精巣の手術件数が、原発事故後に増加した」という論文も、国際雑誌「Urology(泌尿器科学)」に公表している。（2020 年 1 月 29 日　河田）



第 18 期（昨年 10 月）土壌汚染調査結果の報告と考察

（池田 光司）

昨年 10 月に、18 回目の空間線量率（空間の放射能の強さ）の測定と同時に、土壌汚染の調査も行われました。土壌自体の汚染は、2012 年６月の「とどけ鳥」開設以来、検体として持ち込まれたものを中心に測定されてきました。第 16 期（一昨年 10 月）からは、空間線量率を測定すると同時に、土壌採取用の器具を使って一定の深さから一定量の土壌を採取して、より体系的に土壌汚染の状況を調査しています。土壌の汚染は、「土壌１kg に含まれる放射性セシウムの放射線量」で表され、単位は「Bq（ﾍﾞｸﾚﾙ）/kg」です。第 18 期は、245 ヶ所の土壌を採取して、放射線量を測定しました。この第 18 期の結果を、体系的な調査を始めた第 16 期の結果と比較しながら報告します。なお、第 18 期は台風の影響を受けながらの調査だったため、土壌採取が困難な場所もありましたが、南相馬市・浪江町・富岡町・大熊町の各地域から万遍なく土壌を採取し、70%にあたる 180 ヶ所は、第 16 期と同じブロック（空間線量率マップの 500m 四方のマス目）で採取しました。



＜土壌汚染調査結果＞

１）全体の３分の２に当たる地点が「1,000Bq/kg」を超えました。依然、土壌には高い汚染が残っています。通常は、チェルノブイリ事故や核実験の影響があっても、「数十 Bq/kg」程度です。「10,000Bq/kg」を超える地点が 17%ありました。空間線量率が自然放射線レベルに近づいてきた南相馬市の海岸地域でも、平均して「290Bq/kg」あります。

２）第16期と同一ブロックを測定した180ヵ所のデータを平均すると、第16期は「2,460Bq/kg」、第18期は「2,170Bq/kg」でした。ここ１年の土壌線量の低下は、平均して 12%となります。放射性セシウムの物理的半減期から計算した場合は、7%の低下となりますが、土壌線量測定のばらつきを考えると、半減期より大きく低下したというよりも、同程度の低下であったと言えると思います。半減期に従って低下するのか、それよりも早く低下するのかを判断するためには、さらに長期にわたる調査が必要となります。

３）グラフに示しましたように、地域毎に平均すると、「土壌線量の高い地域ほど空間線量率が高い」という傾向が、はっきり現われました。この傾向は、第 16 期、第 17 期（昨年春）にも見られました。

４）最も汚染の高い、浪江町大柿ダム～下津島の地域における土壌線量は、「３万 Bq/kg」と依然非常に高いレベルにありますが、第 16 期は「６万 Bq/kg」でしたので、ここ１年で半分位まで大きく低下したことになります。この地域は、空間線量率も、第 16 期に対して 30%程度の大きな低下が観察されています。なお、「台風の影響で、山間部から高濃度に汚染された土砂が流出するのではないか」という心配がありましたが、今回の調査からは、あったとしても限られた範囲で、広い範囲にわたる土砂流出による汚染はなかったと言えます。その理由としては、

① 全体の線量の平均は下がり、下流側で線量が上昇した地域もなかった

② 大柿ダム付近の線量が大きく下がっているが、すでに半年前の第 17 期に同レベルまで下がっていて、下流域の測定地点でも特に線量が大きく上昇した所はなかったことなどがあげられます。

今回の調査結果の詳しい報告と土壌線量マップは、チェル救のホームページに掲載される予定ですので、ぜひご覧ください。

(http://www.chernobyl-chubu-jp.org/sokutei-map.html)

<拡がる日・ウ交流>

ホステージ基金　イェヴゲーニャ・ドンチェヴァ

チェルノブイリ原発事故の事故処理作業者の日を前に、エミリチネ地区のバラシ村では、33 年前チェルノブイリの災厄と闘った人たちに、村を挙げて敬意を表す催しが行われました。バラシ村だけで、23 人が「黒い痛み(チョールヌィイ・ビーリ)を体験したのです。2016 年、惨事の 30 年後に、この村では、大理石にその人たちの名を刻んだ記念碑が建てられました。そのうち 10 人には、「故人」という印がつけられていました。

バラシ村学校の講堂で、チェルノブイリとその英雄たちを記念する詩と音楽のパフォーマンスが演じられました。催しの主催者たちは、村の公民館のスタッフ、民族音楽アンサンブル「鶴」、学校の生徒たちの参加を要請していました。スクリーンに惨事直後の数日の出来事が映し出され、ステージからは、恐れを知らない英雄である事故処理作業者たちについて、「チェルノブイリの雨を涙のように流して、ウクライナの目は盲（めし）いてしまった」ことについての、心にしみる詩や歌が響き渡りました。

<母親たちの交流>

この機会を借りて、私は『母親たちの心をつなぐ手紙集 チェルノブイリの33年、福島の８年』を、催しの参加者たちに紹介しました。この冊子には、ジトーミル州の女性たち、母親たちの手紙が掲載されています。彼女たちは、自分たちのチェルノブイリ事故後の生活、心痛や不安、どんなことがあっても生き、子ども達を育てようとする努力について語っています。

「このような催しに積極的に参加することで、子ども達は愛国心や、自分の命と環境に対する責任感を学ぶのです」と、学校長のオレクサンドル・ブィコフさんは話しました。「チェルノブイリの英雄と、ウクライナがかつて体験し今も体験しつつあるこの悲劇の記憶は、消えることのないものです。ですから毎年、チェルノブイリ惨事の日と事故処理作業者の日に、本校は必ず祈念行事に参加しています。」

スヴィトラーナ・ベリャクさんは、数年前、「チェルノブイリの人質たち」基金の呼びかけに応えて、チェルノブイリ惨事後の自分の生活について書き、その経験を日本の福島の女性たちに伝えたジトーミル州の女性たちの一人です。上記の冊子に掲載された彼女の手紙は、「私はとても強い女性」と題するに相応しいものです。彼女はそのように手紙の中で書いており、彼女自身がそう感じているのです。バラシ村に生まれ、一生をそこで過ごした彼女は、乳搾りや裁縫の仕事をした後、コンビナートで生産教育に携わりました。二人の息子がおり、彼らは 1986 年にはまだ 10 歳と 12 歳でした。「ニガヨモギと呼ばれる星」が地に落ちてから一ヶ月ほど経って、彼女の夫、トラクター運転手のヴォロドゥイムィル・イヴァーノヴィチは、事故処理作業に召集されました。その地獄を経験した後、たった４年後に彼は亡くなりました。

事故処理作業には、キエフから従兄のムィコラも、その後 甥のオレクサンドルも行きました。ムィコラもすでにこの世の人ではありません。スヴィトラーナ・ムィハイリヴナは、一人で子ども達を育てなければなりませんでした。時には職を失い、お金もなく、また雨露をしのぐ場所まで失くした時もあったのです。新築の家が夜中に焼けてしまったからです。

しかし、善良な人たちと、生き延びたいという彼女の不屈の願いが、彼女を救いました。家族でたった一人の扶養者だった彼女が解雇された時にも、重い病気に罹り治療に充てるお金がなかった時にも、自分だけが生き延びるのでなく、息子たちを独り立ちさせなければならなかった時にも。

日本の母親たちへの手紙の中で、スヴィトラーナ・ムィハイリヴナは、次のようなエピソードを思い出しています。「火事の後間もなく、イヴァン・クパーラのお祭りの日、道を歩いていた私をコルホーズ長が車で拾ってくれ、そして驚かれてしまいました。『スヴィトラーナ、君はあんな不幸に遭ったのに、歌いながら歩いてるのかい(私は「鶴」という国民アンサンブルのメンバーです)』。私は答えて言いました。『だって今さら何ができるって言うんです？』 歌が私を、私の魂を、私の命を救ってくれたのです」

暮らしがますます落ち着き、息子たちがすでに彼女を支えてくれる今も、彼女は歌うばかりか詩を愛してたくさん書き、以前と同じように、自分は強い女性だと思っています。彼女自身が、自分をそのような強い女性にしたのです。

＜30 年続いた、善意と思いやりのマラソン＞

これまで何度も、遠い昔の 1990 年に始まった「クリスマス・カード・キャンペーン」について書いてきました。最初は、日本の母親たちからの励ましのお手紙とカードでした。彼女たちは、ジトーミル州の汚染地域に住んでいる家族を励まそうとしたのです。「優しい言葉はいつでも嬉しいものですね」と、遠い日本からの粉ミルクやカードを受け取ったポレーシェ地方の女性たちは、私たちに話してくれました。私たちはたくさんのカードを州立小児病院に届けました。治療を受ける子ども達は、同世代の子ども達がクリスマス・ツリーの下で楽しみ、お菓子や果物などのプレゼントを受け取っている時、新年の祝日も病院で過ごしていたのです。日本からのカードを受け取ったオーリャという女の子が、1993 年に書いた手紙が私たちの手元に残っています。「日本の人たちがお祝いを言ってくれているなんて、信じられません。私のことを知っていて、治るように力を貸してくれているんですね！」このような善行が、私たちのその後のチャリティーの活動の始まりとなったのです。

2013 年から、私たちのキャンペーンは別の側面を持つようになりました。私たちは学校や幼稚園、一般のジトーミル州民に、福島県の人たちに向けて年賀のカードを書くように呼びかけました。共通の悲劇は、私たちがお互いに対して同じ願いを持っていることを分からせてくれました。そしてもう５年の間、私たちの基金には、芸術作品と呼んでもいいほど立派な大量のカードが送られてきています。子ども達も頑張っていますが、親たちも同じように積極的にこのキャンペーンに参加しています。

滞りない作業のおかげで、今年は日本から送られたカードをちょうど良い時期に学校や幼稚園に届けることができました。伝統的に、12 月末にはこれらの施設で集会があり、子ども達はクリスマス・ツリーの周りで歌をうたい、劇を演じます。遠い日本からのカードを渡すのにちょうど良い機会です。汚染地域の第２ゾーンにあるナロジチ町ギムナジウムでは、いつもそのようにしています。「しっかり勉強して日本のお友だちにお祝いのカードを書いた子は、日本のカードをもらえるんですよ！」ギムナジウムで集会を担当しているアラ・カルポヴァ先生は、こう言ってセレモニーを始めます。

州内の他の学校では、新年の祝日にクイズやゲームをします。よく質問に答えられ、創造性を発揮できた子は、ご褒美として日本のカードをもらうのです。ますます多くの幼稚園が、私たちのキャンペーンに参加してきています。ABC 幼稚園という名前がついている第 53 番幼稚園の教授法専門家であるアラ・リャセンチュク先生の話をお伝えしましょう。10 月に、各クラスは日本のお友だちに宛てたカードを作るという課題を出されます。先生たちが下絵を作り、図画工作の時間に子ども達がそれに絵を描いたり貼り付けたりします。そうして各クラスが自分たちの「作品」を仕上げます。その後、子ども達が日本のカードを受け取ると、めいめいそれを家に持ち帰り、遠い日本からのメッセージをもらったと自慢するのです。「いただいた折り紙に少し手を加えて、クリスマス・ツリーにぶら下げました」と、５歳のナージャのお母さんは話してくれました。

一方、ナロジチ町の「お陽さま」幼稚園の子ども達は、日本に送るカードを作るだけではありません。ここでは創造性を競うコンクールが行われます。優勝者は、新年の集会でサンタ・クロースから、感謝状とちょっとしたプレゼントをもらいます。今年は、ここの子ども達も、カードと一緒にとてもたくさん送られてきた折り紙でツリーを飾り、「日本のツリー」ができました！

私たちのキャンペーンの延長として、スカイプ会議も行われています。私たちは「日本とウクライナの文化交流」というプロジェクトで、もうかなり以前から日本の学校と協力しています。話し合うテーマは、それぞれの国の伝統、若い人たちの関心、エコロジーや医療についてなどです。私たちのカードを受け取って、日本の生徒たちは生中継で感謝の意を表したいという希望を伝えてきました。このような友好の架け橋が、豊橋創造大

学、新潟県の宮内中学校や長岡大学との間に架けられたのです。また、もう長いお付き合いの愛知学院大学からも、初めてカードが届けられました。

州立成人病院では、2016 年にチェルノブイリ被災者のセクションが設けられました。そこでは事故処理作業者や、チェルノブイリ原発事故の被災者の資格を持っている人たちが治療を受けています。彼らが皆複数の病気を抱えており、10～18 日間の長期入院をしているのは悲しいことです。ジトーミル州の遠い地区からやって来る人たちには、ほとんど見舞客もありません。彼らに新年とクリスマスのお祝いをしに行こうという私たちの提案は、病院当局の賛同を得ました。こうして、このセクションの患者たちに初めて日本のカードが届けられたのです。彼らの目には驚きと喜びの色がありました。そして封筒が開けられ、折り紙を見た時の彼らの感謝には限りがありませんでした。「この折り鶴は孫娘にやります、手で何か作るのがとても好きなんですよ、折り方を習わせましょう」と、オレウシクの事故処理作業者であるヴァスィーリさんは言いました。「見てくださいよ、ウクライナ語でお祝いの言葉が書いてあるじゃありませんか。優しい言葉で私たちを本当に励まそうとしてくれているんですね！」と、ナロジチ地区ヴャズィウカ村の事故処理作業者、フルィホーリイさんも言います。このような感激の様子を見て、私たちは同院とのこのような協力を続け、毎年、新年の祝日を前にこのセクションを訪れることにしました。

私たちのキャンペーンは、国際的なものになりました。日本の他の団体との協力のおかげで、私たちはウガンダやネパールの子ども達ともお知り合いになったのです。雪も寒さもないこれらの国では、サンタ・クロースが来ることはありませんが、でも子ども達はお祝いを欲しがっています。それで、ウクライナの子ども達のカードの一部は、いつもネパールとウガンダの学校に送られます。ネパールの子ども達からのカードを受け取るのは、もう３年目になります。

マクシム・ゴーリキイは、「善いことを行う人は、幸せを感じるものだ」と書いています。私たちの子ども達に、良い行いを身につけさせようではありませんか。善い人はいつでも、助けを必要としている人に手を貸すものだからです。そうすれば世界も幸せになるでしょう。私たちはそのことを信じています。（イェヴゲーニヤ・ドンチェヴァ）

油菜ちゃんワークショップ「油菜ちゃんで石けんを作ろう」（第１回）（戸村京子）

1/25（土）、南相馬「菜の花プロジェクト」のなたね油“油菜ちゃん”の消費拡大・販売促進、福島支援を目的に、手作り石けんのワークショップを行いました（@名古屋市）。

今回は“油菜ちゃん”の廃食油で、固形せっけんを作りました。チェル救の市民科学者 河田昌東さんを講師に、参加者は９名。蒲郡、岡崎からの参加もありました。はじめに、石けんの構造や汚れが落ちる原理、石けんのできる化学反応（けん化）などの講義を受けました。

以下に、手作り石けんの作り方をご紹介します。① 苛性ソーダ（取扱注意！）をステンレスボールに入れ、水を注ぎよく溶かす（反応して出る熱、蒸気を吸わないよう注意！）② けん化促進のための焼酎を入れて、沸騰が収まったら、③ 廃食油を流し込みよく撹拌する、④ 撹拌を繰り返す、粘りが出て（けん化）、撹拌の痕（ストリーム）が出たら、⑤ 容器（牛乳の空き箱）に流し込む。⑥ 3 日ほど放置し、固くなったら取り出し、包丁で適当な大きさに切る。そのまま 1 か月間放置して、固形せっけんの出来上がり！！（*この日のワークショップでは①～⑤まで）

作業は３グループで、皆で交代して撹拌したり、差し入れのお菓子とお茶で、楽しくおしゃべりしながら進みました。この“油菜ちゃん”石けんは、台所用・洗髪・入浴・洗濯…と、なんでも使えます。合成洗剤と違って、身体にも環境にも良い手作り石けんです。「油菜ちゃんワークショップ」は、今後もハンドクリームやお菓子作りなどを予定しています。次の機会にはぜひご参加ください。

チャレンジ！「子どもがふみだす復興体験活動」in 東京　(2019.12/29 付 FB 抜粋)

郡山市立東芳小学校の５年生は、「東日本大震災の被害とその影響」「復興に向けての取り組み」「今、復興はどこまで進んでいるのか」を学習しました。津波から避難し、現在は防災について広めている方など多くの方々に会い、その生き方に共感した結果、「誰かにやってもらうのを待つのではなく、ささやかでも自分にできることを行動に移す人になりたい」と、思うようになりました。

12月27日、県の支援で、日本橋の「福島県アンテナショップ MIDETTE 館」で活動をしました。班ごとに、「福島の農産物」「福島の観光、伝統」「福島の未来とエネルギー」の三班に分かれて学習し、自分が思っていることを発表しました。そして福島のおいしいもの、地元郡山の「阿久津曲がりネギ」「クリームボックス」「御前人参」、果物王国福島の「果汁 100%のリンゴジュース」、特産の桃や相馬の再生農地のイチゴを使った「果物の飴」を紹介し、菜種オイル「油菜ちゃん」は、曲がりネギの調理に、マヨネーズは御前人参のスティックに使い、どれも大好評でした。

試食を勧める中で、子ども達に話しかけてくださる方も出て「さっき、話しかけられたよ～。ドキドキした！ちゃんと答えた。」と、頬を上気させる姿にほっとしたり、お客様の温かさに感謝したり、子どもの成長に驚いたりしました。

子ども達の様子を見て、「3 時間前の子ども達とは別人のようです」「子どもの成長には驚かされますね」と、異口同音にお話しいただきました。子どもにとって、体験はいかに大きなステップなのかを改めて思います。

福島県のものを喜んでいただいた経験は、子ども達の自信につながりました。

静岡サレジオ小学校クリスマス会に参加して　（菅野 愛美）

昨年12月、クリスマスカードキャンペーンに協力くださった、静岡県にある静岡サレジオ小学校のとっても心温まるクリスマス会に参加させていただきました！

名古屋から新幹線と電車を乗り継ぎ、約１時間半。静岡サレジオ小学校は、閑静な住宅街にあるカトリック・ミッション系の小学校です。まず門の中に入ると、大きくとても立派な校舎に驚かされます。広い敷地のなか、迷いながらも無事到着。すでにたくさんの児童とお父さんお母さんが受付をしている最中でした。

クリスマス会が始まる直前になると、担当の児童の方が案内してくださり、いざ講堂へ。会の初めに舞台に上がり挨拶をさせていただきましたが、ここでも児童がしっかりと丁寧にエスコートしてくださいました。私のつたない挨拶はさておき、クリスマス会のはじまりはじまり！

まず始めに、５・６年生の皆さん合作のミュージカル「ももたろう」が披露されました。お話は誰もが知る昔話の桃太郎とは一味も二味も違うもので、テーマは勇気と友情！ キャラクター設定に趣向が凝らされ、加えて舞台だけでなく会場全体を大きく使いながら、登場人物が生き生きと描かれているのがとても印象的な作品でした。子どもたちが一生懸命に演じている姿に、自然と涙。決して悲しいお話ではないのですが、それほど生徒皆さんの頑張りが垣間見られる、感動作でした。

続いては、１年生から４年生。それぞれの学年に分かれて、クリスマスとはどんな意味？ クリスマスプレゼントって、なんで贈るの？ など、それぞれのテーマで、キリストの教えを歌と音楽に合わせて紹介してくださいました。どの学年の児童も、よく伝わる大きな声。時折、恥ずかしがっている子もおり、そこもまたとても愛らしく映りました。

終わってみれば、小学校のクリスマス会とはいえ、内容は大人顔負け、とても見ごたえのある充実したクリスマス会でした。

最後に、サレジオ小学校の児童会と後援会からご寄付もいただきました。皆様の温かいご支援に、心より感謝いたします。

テクノロジー問題を考える

（幸田親善人形友の会　成田 重忠）

昨年（2019 年）12 月 1 日、「幸田親善人形友の会」主催で、NPO 法人チェルノブイリ救援・中部理事　神野 英樹氏を招き、「放射能に負けない！ナタネ油でフクシマの農業復興を！」と題して講演をしていただいた。きっかけは 2019 年 3 月 8 日～24 日まで、幸田町大草にある「ギャラリーと珈琲 RIEN（リアン）」（店主・山下裕喜氏）で展示された「フクシマ定点観測」という写真展を見て、感銘を受けた会員が提案をされたことにある。震災発生から約 9 年を経て、問題が風化しつつある今、もう一度考え直して見るいい機会になるはずである。

幸田町中央公民館ホールで約 50 人の参加を得て、簡潔で要を得たキーワード、写真、図式などを駆使したパワー・ポイント資料で説明を受けた後、質問も多く出されたが、時間不足で全部に対応できなかったことを残念に思っている。ともあれ、講演後の質疑応答や聞き取りで感じたことを、私なりにまとめておくことにした。

会場の準備、会員の手作り品、掲示物、展示、本日話題のナタネオイル「油菜ちゃん」、机、椅子などを並べながら、この問題はあまり身近に感じていなかったねとつぶやく。ましてや風化させることがないよう語りつなぐべき言葉（表現）を見つけ出していく必要を感じる。

海野弘著『1914 年―100 年前から今を考える―』（平凡社 2014）は現代の状況がよくわかる本である。彼は 1914 年（第 1 次世界大戦）を古い世紀が終わって実質的に新しい 20 世紀が始まった年と考えている。いろいろな分野ではっきりした節目になる年と考えている。我々の生きてきた 20 世紀がどのような世界になったのかよく語られている。さて、それはそれとして原子力利用の問題についてこの 100 年を考えると大きなもので次のようになる。

★1914 年　戦争は国民と国民との総力戦になり、今までの戦争とやり方が一変する。戦争遂行のための経済学が生まれ、画期的な科学（テクノロジー）が生まれてくるが、原子力の問題はまだ出てこない。

★1945 年　第 2 次世界大戦　ヒロシマ・ナガサキ原爆投下、大量無差別攻撃核兵器の出現

★1979 年　アメリカ・ペンシルベニア州スリーマイル島での原子力発電所事故
この事故で、世界の原発使用の安全に警鐘が鳴らされ、問題視され始める。逆に日本では、1981 年、通産省（現経産省）が原発設置に助成金を出し、国策として奨励している。

★1986 年　ソ連チェルノブイリ（現ウクライナ）原発事故発生。過去最大の事故、現在も多くの問題を抱えている。

★2011 年　大震災による福島第 1 原発事故。原発安全神話は崩れる。

こうしてみると、100 年で 4 回 大きな事故がほぼ 20 年毎に起っている。次は 2030 年頃世界のどこかでと予測ができるほどだ。ロボットのような人間がロボットを作り出して何をするのか。AI 武器で死ぬのは、不特定多数の大量の生の人間。誤作動や誤爆があっても、誰も責任を感じない超無責任の恐ろしい時代。テクノロジーをテクノロジーで解決するには限界が来ている。

結局、神野氏の活動を通じて学ぶことは、これからのテクノロジーの問題をいかに人類がコントロールするかということ。政治家・科学者・経済学者は、何を考えているのだろう。国益よりも、人類や世界の問題を考えてほしい。今生きている人間は、次世代にきちんとした世界を受け渡していく責任持っている。残念ながらこのままでは、人間は自分の作り出したもので一番苦しめられていくことになる。座して待つのでなく、たとえどんなささやか事でも夢を語り、未来のためにアクションを起こす。「幸田親善人形友の会」も、そのための活動を続けたいと思う。人形は黙っていない。NPO 法人チェルノブイリ・中部理事　神野英樹氏らの活動は、まさにその良き範例である。今後も粘り強く持続され、社会に貢献されることを祈っている。

「ふくしまフェスタ」に参加して　（神野英樹）

１月25日（土）と１月26日（日）の両日、福島県（広報課）が主催する「ふくしまフェスタ（in イオンモールいわき小名浜）」が開催され、「油菜ちゃん」も出店（試食コーナーあり）をしました（初日は、小高から応援団も駆けつけてくれました）。当イオンモールは、「アクアマリンふくしま（環境水族館）」や「ら・ら・ミュウ（魚市場）」に隣接する大規模小売店舗であり、週末ということもあって人通りが絶えず、２日間とも大盛況のうちに「油菜ちゃん」のPRを行うことができました。私ごとですが、いわき市は 会社勤めをしていたころ、３ 年間 単身赴任をしていたことがあり、懐かしい人達に再会することもできました（福島は私にとって「第２の故郷」なのです）。この街には、原発事故による被災者が、今なお ２ 万人近く「避難（移住？）」していることもあり、「南相馬」という文字に目を止め、立ち寄って話を聞いてくださる方がたくさんいらっしゃいました。「浪江町に住んでいたけど、もう５ 年も戻ってなくて…」「原町三中で職員をしていた。今は、ようやくこちらの新しい仕事に慣れた」…と、震災後の話をしてくれたり、「小高駅の近くに住んでいたんだけど、あの床屋さんは？ あのお寿司屋さんは？ あのケーキ屋さんは？」…と、逆に質問攻めにあうこともしばしば…。皆さん一様に、散り散りバラバラになってしまった友人・知人を心配し、故郷を懐かしんでいます。

育休から復帰しました！　（兼松真梨子）

みなさま、ご無沙汰しております。会計スタッフの兼松です。2018 年８月から、１ 年４か月の産休育休をいただいていましたが、１月からまた会計の職に復帰いたしました。おかげさまで、二人の子どもたちはすくすくと成長し、上は幼稚園へ、下はこの春から保育園へ通う予定です。現在は、下の子を認可外の託児所へ預けながら、仕事をしています。育休の間は、チェル救の活動にはほとんど関わらず、スマホで時々メールチェックするだけ。テレビはもっぱらこども番組で、ニュースすら見ないので世の中の動きも知らず、ただただ子育てに専念させていただきました。出産前は、上の子もまだまだ手がかかるのに、二人目が生まれてきて大丈夫だろうか？ ちゃんと子育てできるかな…と不安もいっぱいでした。でも案ずるより産むがやすし、二人目の出産は経験している分、あまり辛いとか苦しいとか思いませんでした。出産後、入院中にはじめてお兄ちゃんが妹に対面した時、とても愛おしそうに見つめる姿に、そして、私に甘えたいけど頑張って我慢している健気な我が子にたまらず涙が出そうになるのをこらえ、しっかりと抱きしめたとき、「ああ、大丈夫だ。やっていける。私はこの子たちの母なんだ･･･」と、力が湧いてきたことを覚えています。生後３週間で、お兄ちゃんから RS ウイルスをもらい入院しましたが、それ以外は健康で、ちょっとやそっと放っておかれてもへっちゃらで、自己主張もしっかりできるたくましい女の子に成長しました。私も日々、親として成長させてもらっています！

さて復帰早々、すでにタスクがいっぱい…でもやるべき仕事があるのは喜ばしいこと。チェル救史上最大の財政難に立っている今、会計として私にできることをしっかり努めていきたいと思いますので、よろしくお願いします。そして、大森さん、厳しい財政難に会計を担ってくださり、本当にありがとうございました！！

事務局便り

2020 年スタート！と思った途端にインフル A。インフルお決まりの「蟄居」期間をやり過ごし、遅れ馳せながらの仕事始めとなった。事務局は春たけなわのイベント月間・４月に向け、事務局３名＋強力助っ人 MAN で力を合わせ（いい言葉だな～）おもむろに始動。その４月は「測定」を皮切りに、チェルノブイリから丸 34 となる「4・26」―チェル救活動 30 年イベントへと続く。「原子力利用に伴うデメリットを明らかにする研究」を続け、京都大学複合原子力科学研究所・非常勤研究員 今中哲二さんをお招きし語っていただく。チェルノブイリ原発事故とそれから 30 年、東電福島第一原発事故とそれから 10 年目を振り返り、菜の花が拓く「これから」を展望する。乞うご期待！ （山盛）

【寄付のお礼とお願い】

ポレーシェ 174 号で、チェル救の現状をお伝えして寄付の依頼をしましたところ、多くの皆さまから寄付をお寄せいただきました。本当にいつも助けていただきましてありがとうございます。12 月と１月（1/24 現在）にお寄せいただいた寄付は 170 万円を超えまして、今年度も無事にチェル救の活動を終えることができそうです。感謝の限りです。本当にありがとうございます。来年度の４月には、10 年目となる「放射線量測定プロジェクト」を予定しています。このプロジェクトの予算確保が、現在最も差し迫った課題のため、助成金の申請をしています。もし申請が認められなかった場合には、チェル救の自己資金でプロジェクトを実施することも考えられます。皆さまには、またご無理をお願いすることがあるかもしれませんが、今後もチェル救を見守っていただけますと嬉しいです。どうぞよろしくお願いいたします。 （理事一同）

【会計臨時担当退任のご挨拶】

2018 年５月から臨時で会計を務めさせていただきました。先月（1 月）から兼松さんが復帰されましたので、僕の任を終了いたします。皆さまからのメッセージがとても嬉しかったです！ いろいろな経験ができました。ありがとうございました。 （大森 融）

編集後記

☆暖冬の影響で冬でもダニがうごめいているらしい。昨年夏こっぴどくダニにやられた。この雪辱を晴らすため、①家内生息地特定 ②効果的な駆除方法 この２つの調査に頑張ります。（佳）

☆置き時計の電池切れ。高級ボタン電池と入れ替えたのに、秒針がピクリとも動かない･･･試しに数回叩いてみた。効果てき面！ ふ～ん、アナログ時計は、ショック療法が効果的なんだ。（美）

☆昨年は、「アベ政治（モリ・カケ・桜・再稼働）を許さない！」「れいわ新選組（初の市民政治団体）誕生！」「#ME TOO（詩織さん民事勝訴！）」「伊方原発３号機運転差し止め判決（広島高裁仮処分決定！）」…など、変革の兆しが目に見える一年となった。

日本は今、一国の「総理大臣」による「税金の私物化」「財政法違反」「公職選挙法違反」「政治資金規正法違反」「反社会集団との癒着」…etc.、野党の当たり前の追及に「黙秘権」を使わざるを得ない状況に追い込まれている。残念ながら、民主主義が壊れてしまっている。

いよいよ、待ちに待った「令和２年」。市民が「ONE TEAM」となって、一生に一度の変革を実現する年が始まった。今年は、日本の歴史に刻まれるべき、大変革の一年になる。（J）

〒 456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14
印刷 「エーブリント」
TEL・FAX（052）871-9473